

深沙大将について

令和五年四月十八日 於加茂法話会

正壽寺住職 吳 定明合掌

能「大般若」あらすじ



唐僧玄奘三蔵法師が大般若経を伝来しようとシルクロードから天竺（インド）

へ向かう途中、西域の流砂河（りゆうさか）に差し掛かる。そこで怪しい男

に出会い、男は語り始める。この河は深き千尋（ちひろ）の難所であり、その向こ

う岸にそびえる葱嶺（そうれい・パミール高原、タジキスタン、アフガニスタン、中国などにまたがる平均標高五千メートルに達する高原、世界の屋根）も険しく、天険（てんけん、自然の要害）で、まず超えることは困難である。さらに、この河の主は深沙大王であり、志を試すため、これまで七回命を奪っていたが、今度こそ經典を与えようと言って姿を消す。すると、三蔵の前に菩薩が現れて舞樂を奏し、大龍、小龍が三蔵を拝する中に大般若経の笈を背負った深沙大王が現れる。笈を開いて三蔵とともに經文を読み上げ、この経の守護神になろうと約束すると笈を与える。三蔵は喜び笈を背負って流砂に向かうと河は二つに割れ、三蔵は易々と渡り、深沙大王は見送る。

《西遊記》は、流砂河という大河であるとし、その主が沙悟浄（さごじよう）、深沙大王の変形で、彼が首から下げている七つの觸體は、三蔵が前世で奪われた七つの命を表しているという。

玄奘三蔵（602年～64年）という名前は皆さんご存知ですが、そもそも「三蔵」とは仏教の經典（經蔵）、戒律書（律蔵）、注釈書（論蔵）の三つを指し、仏教の意義を抱え持っていることから三蔵と呼びます。「經」、「律」、「論」の三蔵に通達している学僧を尊称して名前の後に三蔵をつけて呼んでいたようで、三蔵に通達している「玄奘さん」ということなのです。日本のことわざで『七転び八起き』という言葉があります。

溪嵐拾葉集に叡山の光宗が応長元年（一三一）から貞和四年（一三四）にかけて叡山天台の行事・作法や口伝法門などを集録したものの「守護神深沙大王。是則多門天化現也。玄奘三蔵渡天ノ時、其七生ノ靈骨ヲ頸顯懸タルハ今深沙大王是也」（頸顯懸・胸元には七つの觸體が下げられ、七度命を失った玄奘を表している）

玄奘三蔵が渡天の際に深沙大将に出会った話で、『大慈恩寺三蔵法師伝』巻第一によると、「五日月の夜半に夢に一大神が現れ、戟をとってさしまねき、「どうして強行せず、そのまま寝ているのか」と言った。三蔵は目を覚まし、進むと池を発見し、水を得ることをできた。」「一大神がその力によって三蔵に水を与えていることがわかる。この一大神、九世紀常暁が、入唐した頃には深沙神王（深沙大将）と呼ばれている。

①室町時代に作られた能『大般若』では、「深沙」から「真蛇」へと音通によって変化した。

②太山府君のもつ冥府の支配者という性格を深沙大将にもたせることで、死者の冥福を祈る人々から信仰を集めたと考えられる。

③ひとつは深大寺縁起である。『深大寺真名縁起』は、「深大寺縁起繪巻詞書」（享保七年（一七二二）通称仮名縁起）により、正保三年（一六四六）の火災後、深大寺五十七世辨盛が深大寺縁起を再編、漢文体で『武陽多麻郡浮岳山深大寺晶樂院縁記』一卷を慶安三年（一六五〇）に著したものとされる。『深大寺真名縁起』では、深大寺開山の満功上人の父母の話の所で深沙大王が現れているので紹介する。「福満（父）が郷長右近の娘（母）と恋をしたが、娘の両親によって娘は池水の中嶋へと離されてしまった。そこで福満は三蔵法師が天竺に行く途中深沙大王に助けられたことを思い出し、深沙大王に祈願した。深沙大王は福満の願いを聞き入れ、大靈龜を遣わし、福満は娘が待つ池水の中嶋に渡ることができた」という話である。これによると深沙大王は大靈龜を遣わし、障害となる池水を渡る術を福満に与え、水に対して力を示している。

④勝道上人（天平七く弘仁八年（七三五く八一七）日光山登頂にまつわる山管の蛇橋（神橋）の伝説である。それは『日光山志』天保八年（一八三七）『勝道上人が大谷川を渡りかねたとき、神仏に祈ると、深沙大王があらわれ、手にした青赤の両蛇を放つと、一条の長橋となり、さらに蛇橋の上に山管が生じ、上人は徒弟とともに渡ることができた』というのである。また長坂登り口（神橋を渡った突き当たり）に深沙王社があり、「神橋守護神とす本地毘沙門を安ず」と記されている。

⑤『補陀落山建立修行日記』には、「天平神護二年（七六六）勝道上人が河を渡ろうとして呪を誦すと河の北涯に化神が現れ深沙大王と名のり、玄奘三蔵と同様に渡し奉ろうといい、右手にもっていた二蛇を放つと虹のような橋となり、上人は教えにより蛇橋を渡った。

⑥日本に請来された時にはすでに深沙大将が水神としての一面を持っていたことが窺える。その後、歌学や勝道上人の伝記、宴曲「補陀落靈瑞」、能「大般若」によって深沙大将という神の存在と水神としての一面が広く流布したと考えられる。深沙大将が日本において、水神としての一面を示し、信仰されたことは上記の考察から明らかである。

なぜ深沙大将は葛城修験の守護神であるのか。深沙大将は、「僧常暁請来目録」では玄奘三蔵が渡天の時感得したとされているが、これとは別に法華読誦者を守護する話がある。『別尊雜記』裏書「深沙大将菩薩儀軌要一首」では、「法伝という比丘が天和元年（五六六）發願し、里から十余里離れた曠野で法華經を誦んでいたところ、七日目に一人の小児が現れ七年間驅使した。その小児が名を深沙大将という此野の鬼神であった」という。

深沙大将は、まずその奇異な姿に驚かされます。髪を逆立て、眼を見開き、顔の半分もあろうかと思われる大きな口を開け、物凄い形相で、普通では考えも付かないような、姿をしています。その姿で最も特徴的なところは、膝頭から象の顔が出ていることです。これは「象皮(ぞうひ)の面」といって、象の顔が付いた皮の半ズボン(膝当とも)らしいのです。動物の皮や面などを衣服の一部に使用する例は、天部の諸尊に比較的多く見受けられます。四天王立像などの鎧(よろい)の肩などに見られる獅鬚(しがみ)と呼ばれるものや、薬師十二神将像の眷属の神将などにも動物の皮面をつけています。次に特徴的なのは、ドクロを胸飾りとして上げられます。このドクロを飾りとするのも大威徳明王・伊舎那天・降三世明王・軍荼利(ぐんだり)明王などと同じですが、いずれも仏教化される以前の姿を色濃く残しているものと考えられます。深沙大将の場合ですと、七つのドクロを胸飾りとするのには、玄奘三蔵が七度生まれ代わった、それぞれの頭蓋骨であると伝えられています。玄奘(げんじょう)三蔵(602年〜647年)とは、中国からインドに経典を求めて旅をした僧です。この玄奘三蔵が旅の途中、砂漠で一滴の水を得ることができず、息絶えようとしている時、流砂の中より現れて護(まも)ったのが、深沙大将であるといわれています。腹部を見てみますと人面(じんめん)が表わされています。その理由として明確なことはわからないのですが、一説には、中国での深沙大将は、別の姿が「童子(どうじ)」「であったということです。このことから童子(どうじ)の顔が腹部に表われているらしいのです。現代風というと、童子の体に深沙大将が憑依して、童子の顔だけが腹部に表れたということになります。深沙大将の信仰は、上記の理由などによって、砂漠の熱風や悪疫の難を除く、旅人の守護神として、また玄奘三蔵がインドから持ち帰った「般若経」の守護神としてまつられました。この「般若経」の守護神として描かれている本尊に、般若十六善神像(しんぞう)があります。般若経を護る十六善神とともに、般若経が詰まった笈(おい)を担ぐ旅姿の玄奘三蔵、それと対峙する形で、深沙大将が描かれています。憤怒の相で怒髪天を突き、觸髅を数珠と繋げたをして、腹部には童子の顔が覗いた姿で横され、左腕には蛇がとぐるを巻いて戟、または鉢を持っている。多聞天(毘沙門天)、観音菩薩、伎芸天の化身だともされ、日本へは常暁という僧侶により齎されると、カッパのモデルにもなったとされる。(常暁・じょうぎょう、生年不詳・貞観八年十一月三十日(八六七年一月九日))は、平安時代前期の僧。小栗栖律師・入唐根本大師とも称される。

真言は 唵 阿佈留 阿佈留 沙羅 沙羅 娑婆訶 「オン・アフルアフル・サラサラ・ソワカ」

豊富、充滿、満、甘露、財福、施與、吉祥成就。

